

FIWC KYUSHU
NEPAL CAMP
IN SUMMER
2018



Yu Rocky Shunsuke Yuya

Airi Maki Kasumi Hinata

Yuka Eriko Mai Yudai

With our Family

in Nepal Sindpalchok

Ghumang Maneswara



目次

1.	はじめに	P.3
2.	FIWC について	P.4
3.	ネパールについて	P.4
4.	重要人物紹介	P.7
5.	スケジュール	P.9
6.	事後アセスメント&事後報告	P.11
7.	ワーク詳細	P.13
8.	その他の活動（プロジェクト）	P.17
9.	イベント報告	P.26
10.	KP より	P.29
11.	保健係より	P.29
12.	会計報告	P.33
13.	ネパールでの生活	P.35
14.	その他の活動（観光、JICA・UN Habitat 訪問）	P.37
15.	他己紹介	P.41
16.	感想	P.44

1.はじめに

ネパールで地震が発生して3年。

復興と呼べるまではまだまだ先は長いようだ。

未だ村には、ビニールを壁がわりにした家もいくつか存在する。

鉄筋コンクリートの家は村にいくつかしか存在せず、

建設の途中で中断しているものも多くある。

今回我々が協力する“グンバ”は、村唯一の公共施設である。

“グンバ”は、日本で言うところの公民館の役割と、

お寺の役割の両方を持つ。

人と人とのつながりや、村の人たちの信仰にとって、

最も重要な建物の一つであることは間違いない。

その“グンバ”も3年前のネパール大震災で倒壊した。

村の人たちは、再建に向けてそれぞれ資金を出し合ったが、

目標額に及ばず、建設の途中で中断している。

“グンバ”が存在したときの記憶がある村の人々は、

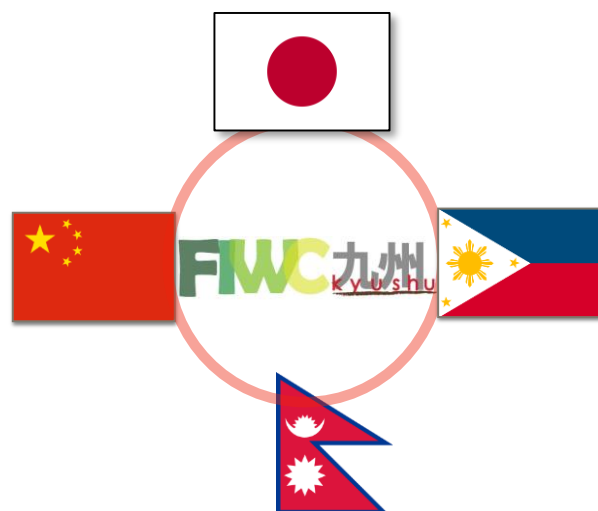
その重要性から再建への思いを強く願っている。

我々は、その強い思いに惹かれ、今回も同じ村での活動を決めた。

2. FIWC について

FIWC とはフレンズ国際ワークキャンプ(Friends International Work Camp)の略称である。ワークキャンプ運動が第一次世界大戦後にピエール・セレゾールによって提唱され、第二次世界大戦後にアメリカフレンズ奉仕団(AFSC)によって日本にもたらされ、活動してきた。それが 1950 年代に日本の組織として FIWC という名で AFSC から分離・独立した。それ以来、60 年以上国内外で活動している。現在、FIWC は関東、東海、関西、九州の委員会があり、それぞれで活動している。

私たち FIWC 九州は主に福岡の大学生が主体となり、運営・活動を行なっている。国外ではネパール・フィリピン・中国でワークキャンプを行い、国内ではハンセン病療養所を訪問しハンセン病の啓蒙活動や、大分県中津市の耶馬溪で農業キャンプを行っている。私たち FIWC 九州は学生による非政府組織(NGO)であり、いかなる宗教・政治団とも一切関係のない学生団体である。



3. ネパールについて

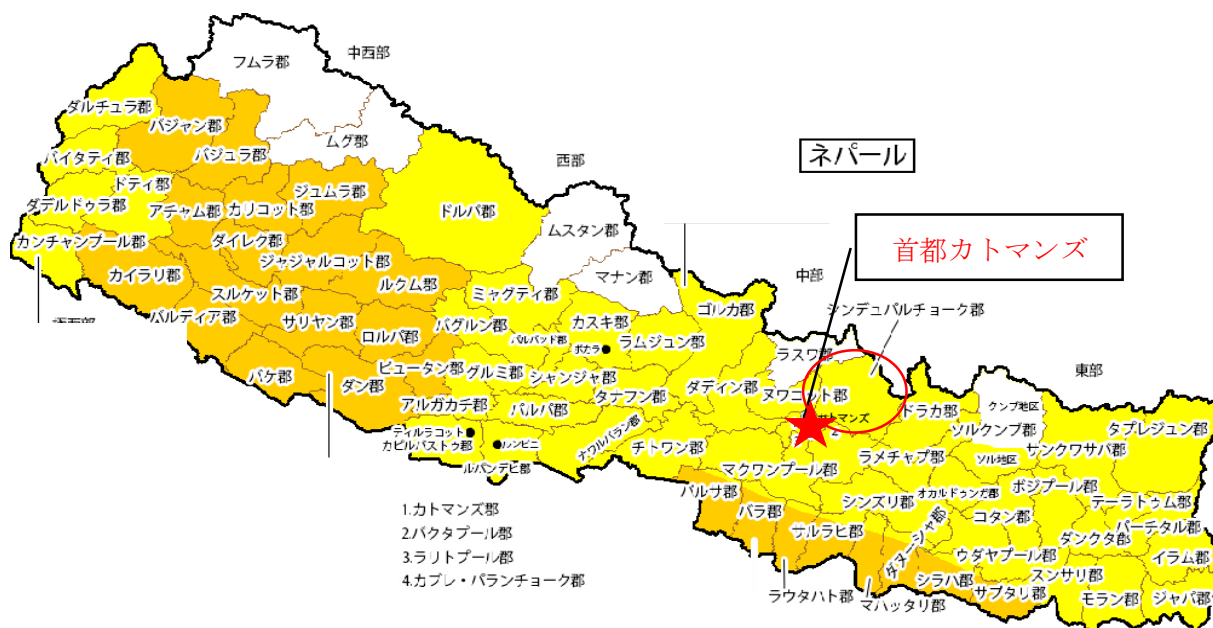
- 基礎データ

首都	カトマンズ
面積	14.7 万平方 km (北海道の 1.8 倍)
人口	2898 万人
人口密度	197 人/平方 km
民族	バフン、チェットリ、タマンなどの 60 以上の民族
公用語	ネパール語
宗教	ヒンドゥー教、仏教、イスラム教
識字率	65.9%

(出典：外務省データベース)

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/data.html#section1>

● 地理

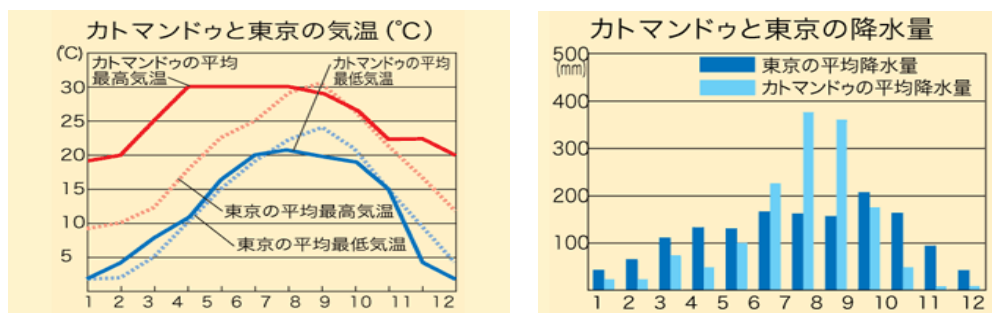


※○部分は、今回訪れたキャンプ地の、シンドウパルチョーク郡

(外務省 海外安全ホームページ:

https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcinfectionspothazardinfo_010.html#ad-image-0 より一部加工)

● 気候



出典:「地球の歩き方 ネパールの天気&服装ナビ」,

<http://www.arukikata.co.jp/weather/NP/>

- 一日ごとの気温の寒暖差が激しい気候であるため、早朝と正午過ぎの気温が著しく異なる。
- 年間の降水量の変化が大きく、夏は雨季となり多くの雨が降る一方で、冬から春にかけては乾季となり雨が降ることが少ない。

- 今回、雨季にネパールを訪れたが日本の梅雨とは違い一日中雨が降ることは少なく、夜から朝方にかけてまとまって降ることが多かった。

- 2015年4月25日のネパール大地震について

震源：カトマンズ北西、地震の規模：マグニチュード7.9

被害状況：負傷者2万人、死傷者1万人、被害者800万人(ネパールのみ)

経済損失：約6000億円。これは当時のネパールのGDPのおよそ4分の1に値する。

復興状況：地震発生直後は、多くの国やNGOからの支援が届いた。首都カトマンズでは復興が進んでいるものの、農村部ではトタン屋根の仮設住宅に暮らす人が多くみられる。

4. 重要人物紹介

ママ (コモラ・ラーマン)



私たちが1ヶ月間ご飯や寝床でお世話になったキャンパーのお母さん的な存在であったママ。ご飯の時に、食べ終わるとすかさずご飯やおかずをよそいに来てくれたり、髪の毛を可愛く結ってくれたり、何か体調不良などがあったら心配してくれたりして、言語があまり通じないのにキャンパーと仲がよかった。ママのおかげで毎日元気に活動することができた。日数が経つにつれ、ゲラゲラ笑う姿やキャンパーをいじる姿がみられ、仲が段々深まっていくのが感じられて嬉しかった。

パパ (ポドム・ラーマン)

私たちが1ヶ月間ご飯や寝床でお世話になったキャンパーのお父さんの存在。穏やかでいつもニコニコしていて私たちの癒しであり、日本に連れて帰りたい！！というキャンパーが続出していたほどの人気っぷり。村を歩いていると、村人の家の前で村人とパパが話している姿をよくみることがあり、村人とも仲がよく、頼りにされているのだなと感じた。



筋田雅則さん



ネパールのサンガという町で銀杏旅館を経営している日本人。登山が大好きでヒマラヤ山脈に登るために何度かネパールを訪れていた。その過程で貴重な経験を与えてくれたネパールに何か恩返しをしたいと思い、村の子供達のために学校を作った。現在は、ネパール人の子供4人達が銀杏旅館のお手伝いをする一方、彼らの生活費や学校に行くためのお金を支援しながら一緒に暮らしている。村へ移動する前の2日間、この旅館で美味しい日本食をたっぷり振舞って頂き、自分の経験などを沢山話して下さって、沢山の元気とこれから始まる活動へのモチベーションをあげてくれた。

パネちゃん (スンダー・ラマ)

コーディネーターと通訳を担当してくれたイケメン細マッチョなネパール人。ネパール語、英語、日本語の三カ国語が堪能で、運動神経が良く、料理もできて、その上ノリがよく面白いという、かっこいい部分もかわいい部分も持ち合わせている大変有能な方である。キャンパーも何かあればとりあえずパネちゃんに言えば大丈夫！となるほど頼りにしていた。村を出る時泣かなかったキャンパーもパネちゃんと空港で別れるときはほぼ全員泣いていたくらい皆に懐かれていて好かれていた。春のキャンプもパネちゃんがいるから安心ですね！



クリシュナー・ドン

私たちの活動に大変協力的な村人の1人。本業はアーティストで、私たちに自分のMVをみせてきたり、曲を聴かせたりしていた。とてもフレンドリーなので親しみやすく、英語が話せるためキャンパーとの距離も近い。16歳の女の子と最近結婚したらしいが、「カンチマヤル〜！！(愛人)」とキャンパーの女子勢に言って回るのが趣味である。

ミーラン・タマン

私たちの活動に大変協力的な村人の1人。村で私たちを見かけると、声をかけてくれ、輪の中に入れてくれたり、空港までわざわざ見送りにきてくれたりする優しい青年である。前のキャンパーとの写真を私たちにみせながら思い出話をする姿が微笑ましく印象的であった。



5. スケジュール

キャンプ前スケジュール

- 2018.5.9 合同説明会@びおとーふ
- 2018.5.16 ネパールキャンプ説明会@西南クロスプラザ
- 2018.5.25 キャンパー締め切り
- 2018.5.30 第0回ミーティング@西南図書館 第5会議室
- 2018.6.12 第1回ミーティング@びおとーふ
- 2018.6.27 第2回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.2 第3回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.4 第4回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.10 第5回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.12 熱研安全セミナー@九大病院キャンパス
- 2018.7.17 第6回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.24 第7回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.27 第8回ミーティング@西南クロスプラザ
- 2018.8.6 最終ミーティング @びおとーふ

キャンプスケジュール

8/9	福岡空港発 (福岡—北京)
8/10	カトマンズ着 (北京—昆明—カトマンズ)
8/11	ハビタット訪問 銀杏旅館宿泊
8/12	村に到着
8/13	事後アセスメント (現地調査)
8/14	事後アセスメント (現地調査)
8/15	村人との MTG (GAM)
8/16	ニーズ調査・生活状況調査
8/17	ニーズ調査・生活状況調査
8/18	ニーズ調査・生活状況調査
8/19	ワーク・プロジェクト MTG
8/20	VISIT
8/21	VISIT
8/22	エンジニアさんと MTG
8/23	VISIT

8/24	イベント準備
8/25	イベント
8/26	イベント片付け、プロジェクト・ワーク MTG
8/27	VISIT
8/28	村発、ラムチェ村訪問
8/29	京都外大の学生団体の皆さんと交流
8/30	移動(ラムチェ村→カトマンズ)
8/31	JICA 訪問
9/1	観光
9/2	カトマンズ発 (カトマンズ-昆明)
9/3	福岡空港着 (昆明-上海-福岡)

※『VISIT』とは村内の家々を訪問し、人々と交流することである。

※びおとーぷは、FIWC 九州委員会が加入している NPO・NGO 共同事務所である。

6. 事後アセスメント&事後報告

●事後アセスメント

前回行ったワークを含めた活動が村人にどのような影響をもたらしているのかを調査するため2018年春の活動の事後アセスメントをアンケート方式で実施した。



<2018年春ワーク概要>

場所：Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal

内容：コミュニティハウス建設(屋根)

期間：2/28(水)～3/29(木)

参加者：現地人コーディネーター、ワーク地の村人、FIWC九州

<アセスメントの結果>

グマンマニサワラ村の18世帯(性別問わず)に5つの質問を5件法で行ってもらい2つの自由記述の質問を行った。

前回の活動について

- | | |
|----------------------------|--------|
| 1. 私たちの滞在はどうでしたか？ | 平均 4.7 |
| 2. 活動によって村の生活は向上しましたか？ | 平均 4.6 |
| 3. 村人がプロジェクトに参加しましたか？ | 平均 4.1 |
| 4. プロジェクトに参加した村人は楽しかったですか？ | 平均 4.4 |
| 5. 再びFIWCがこの村に滞在してよいか？ | 平均 4.7 |

自由記述

- あなたの現在の生活で今一番困っているものは何ですか
A、家のこと、村に行くまでの道路、病院
- あなたは以前村のために仕事をしたことがあるか？
A、水道タンク、道路、道路補修等、コミュニティハウス

～事後アセスメントの統括～

今回の事後アセスメントによって、現在コミュニティハウスはあまり使用されていないことが分かった。理由としては、現在のコミュニティハウスは屋根だけしか完成しておらず本来の目的である冠婚葬祭などに使用するには建物としての機能が不十分なためである。そして GAM とニーズ調査の結果からどちらもコミュニティハウスの完成を望んでいた。そのため今回は新たにワークを探すのではなく引き続きコミュニティハウスプロジェクトを行い、少しでも早い完成を目指す。

また、我々がこの村で滞在することに対してはよい評価が得られた。

<現在のコミュニティハウスの状況>



● 事後報告

- ・前プロジェクトである屋根の完成がギリギリになったため屋根を支えるサポートの除去の撤去をコーディネーターに任せてしまった。このサポートは様々なところから借りたためコーディネーターだけが返却する負担が大きかった。
- ・コミュニティハウスの支柱や屋根の劣化が目立った。

7. ワーク詳細

● ワークリーダーのあいさつ

今年度ワークリーダーを務めることになりました西南学院大学 2 年の洲崎裕也です。春に参加してくれる皆さんがこのキャンプに参加してよかったと思えるようなワークにしていこうと思うのでよろしくをお願いします！

● 今年度のワーク地決定に至るまでの流れ

初めに 2019 年度ネパールキャンプを行うにあたり、前回の春に活動を行ったグマンマニサワラ村で活動するのか、別の村に活動場所を移動するのかを検討した。また、同じ村での活動となる場合、ワーク内容を変更すべきかを話し合った。

● キャンプ地を選択する際のメリットとデメリット

➤ 前回行ったグマンマニサワラ村

メリット

- ・引き続き同じ村に訪れることによりキャンパーと村人の信頼関係が築ける。
- ・前回受けた村人たちのニーズに応えることができる。

デメリット

- ・同じ村で活動するためほかの村の情報を得られない。
- ・村を平等に扱えなくなる。

➤ 別の村で活動を行う

メリット

- ・ほかの村に行くことによっていろんな情報が得られる。
- ・いろんな村を平等な立場で扱える。

デメリット

- ・前回の村に滞在する日程が短くなるため関係づくりに影響する。
- ・ネパールは下見期間中が雨季であるため、ほかの村を回る場合、安全面のリスクが生じる。

以上のメリットとデメリットが出たが、前回と同じ村で活動することで得られる「キャンパーと村人」間の信頼関係の構築が最大のメリットであると考えた。そのため、今年度のキャンプも前回の春に活動を行ったグマンマニサワラ村で活動を行うことが決定した。

- ワーク決定に至るまでの流れ

今回プロジェクトを決定するにあたり GAM とニーズ調査の二つを行った。

- GAM(村の人たちと FIWC による MTG)

この GAM によって、我々 FIWC が今年も村を使用させてもらうという挨拶と村の人たちが我々に何を協力してほしいのか、そして村にとってこのコミュニティハウスがどのような役割を成しているのか、この村にコミュニティハウス建設以外のニーズは存在するのかを把握するために GAM を行った。

- 今回の GAM で分かったこと

- ・村の人たちは建物として機能するレベルのコミュニティハウスの完成を望んでいる。
- ・村からも予算を出したいが個人の生活費を賄うので精一杯なため現状不可能。
- ・コミュニティハウスの完成により、冠婚葬祭の場や緊急時の避難場所等の活用が見込まれる。



- ニーズ調査

GAM では引き続きコミュニティハウス建設の要望が出たが、村人おのおのがどのようなものをニーズとしているかを知るため調査を行った。ワーク内容は GAM とニーズ調査の結果をもとにキャンパー内で決定することにした。

ニーズ調査の結果、多くの村人がコミュニティハウスの完成を望んでいることからコミュニティハウスの建設を引き続き行うこととした。



- ワークを決定する際の注意点
 - ・ワークが公共性を重視したものであること
 - ・村人のニーズが一致していること

- ワーク内容

～概要～

場所： Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal

内容：コミュニティハウスの建設(階段と壁の建設)

期間：2月の下旬～3月下旬の3,4週間程度

参加者：現地人コーディネーター、ワーク地の村人、FIWC九州

2019年度春キャンプ コミュニティハウスプロジェクト	
ワーク地	Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal
ワーク詳細	コミュニティハウスの壁と階段の建設と利便性向上のための周辺整備
工期予定日	18日間予定 2月の下旬～3月中旬の3週間程度
ワークを行う目的	村人と共同でワークを行うこと。 協力して建設することにより村人間の交流を深めること。
ワーク予算	最終完成までの予算：85万円 今ワーク予算：50万円 階段における費用：20万円 壁における費用：30万円
予算の集め方	クラウドファンディング、キャンパーによる拠出金
ワーク参加者	FIWC キャンパー、現地コーディネーター、現地の村人


● 今回のワークの計画


1. 階段を作ろう！

初めに階段を作ります。予定では赤い部分に階段を作っていきます。写真にある四角い穴から飛び出している針金を用い、レンガとセメントで階段を製作していきます。

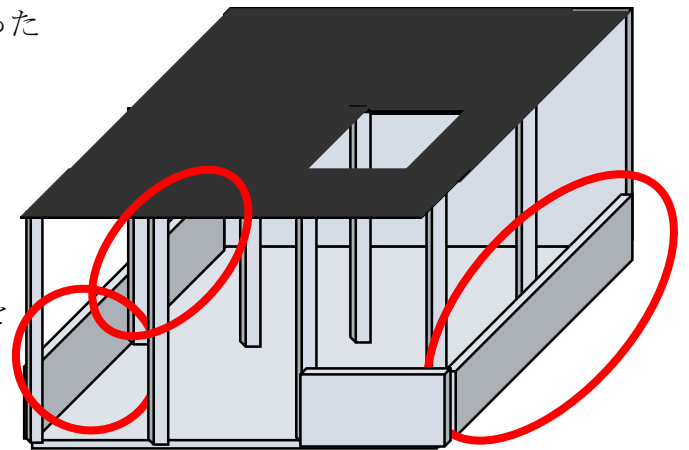


2. 壁を作っていこう！

 この色は村人が自分たちで作った部分です。

 この色は前回のキャンプで作った屋根になります。

今回は2箇所の楕円形の部分のレンガを削り取り、丸い部分に削り取ったレンガを結合していきます。



現段階では壁を2面建てる予定です。

壁には窓も取り付ける予定なので、ネパールに向かう前に現地コーディネーターに資材の取り寄せをお願いします。

3. 周辺を整備しよう！

このようにコミュニティハウスの周辺の道が非常に狭かったり、道路がいびつだったため整備していきます。

方法としては、右の写真のように土山があるのでそれをスコップ等で削り取る予定です。この作業は階段を作っている時に平行して行います。



8. その他の活動（プロジェクト）

● プロジェクトを開始した背景

前回の春のネパールキャンプからグンバの建設に関わり始めた。当初、村の人々はグンバ建設のために、自分たちの生活費からお金を出し合いグンバの基礎と柱、壁1枚を造っていた。しかし、集めた資金も尽き、グンバの建設は中断された状態であった。そのような状況で、私たち FIWC 九州ネパールキャンプはグンバを一緒に建設することになった。ネパールキャンプでは、助成金やクラウドファンディングを用いてグンバ建設のワーク資金を集めたが、建設に必要な費用を集めるのは容易ではない。また、村の人々が望んだグンバ再建であるため、村の人々自身にもグンバの建設を一緒にやってもらうだけではなく、資金の調達も共に行なっていきたいと考えようになった。JICA のネパールオフィスを訪問した際も、震災後、インフラをはじめとしたハード面の支援が中心で行われているが、今後、生計を立てるためのノウハウを身につけるといったソフト面の支援も必要になるという話を聞いた。ネパールでキャンプを続ける中で、私たち FIWC 九州でもソフト面の支援ができるのか模索する時期なのではないかと考え、ワークに付随する形でプロジェクトと称し取り組むことにした。

● 今回のプロジェクトの活動

～生活状況調査～

今回私たちは生活状況の調査をするためグマンマニサワラ村の全家庭を対象にアンケートを行った。アンケートには英語とネパール語で質問項目を書いた質問用紙を用い、口頭にて質問項目を読み上げ回答してもらった。なおアンケートは各世帯に行った。今回調査を行った項目は以下の通りである。

- ① 土地の使用状況
 - ② 家族構成
 - ③ 職業
 - ④ 一日の生活スケジュール
 - ⑤ 手工芸品作成の経験について
 - ⑥ 1か月の食事に充てる金額
- これらの項目を、全 14 家庭を対象に質問した。



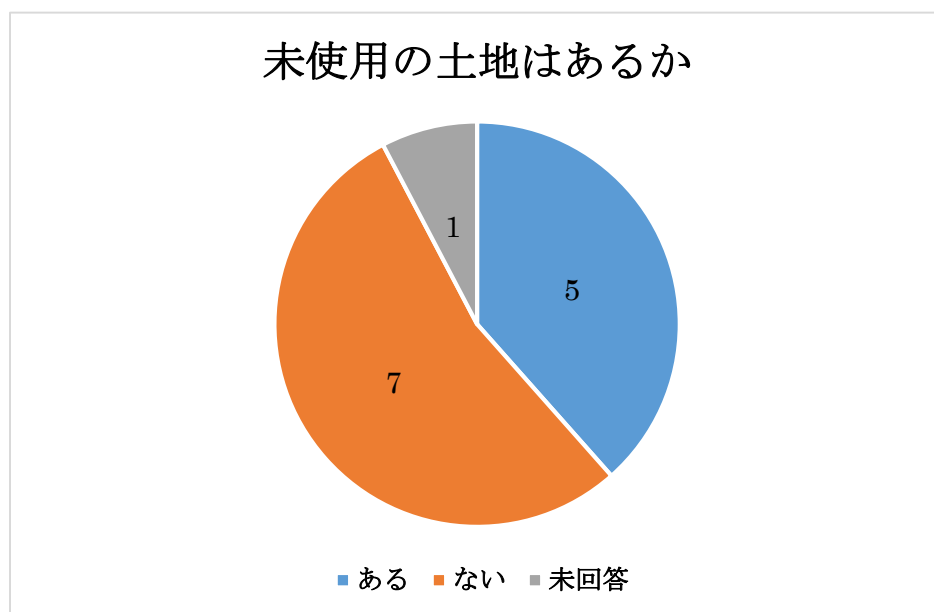
① 土地の使用状況

土地の使用状況を知るために具体的に土地の使い方と未使用の土地はあるかという2点を質問した。

<結果>

土地の使い方については、全家庭が農地と回答した。

私たちが調査を行ったのが雨季であったこともあり、どの家庭も土地は農業のために使用していた。主にトウモロコシの生産が行われており、ほかには米、粟、キュウリが挙げられた。次に、未使用の土地があるかという質問についての回答は以下のグラフのとおりである。

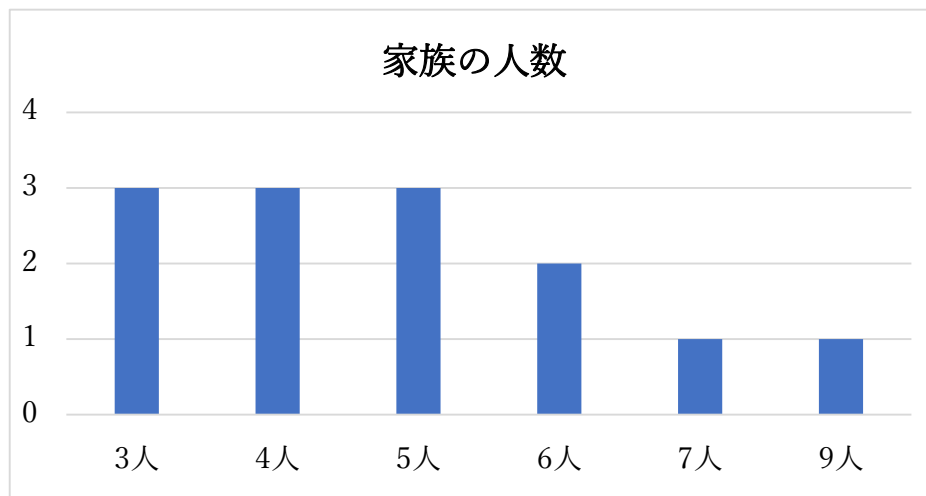


② 家族構成

家族構成を調査するとともに家庭の中で主な稼ぎ手と主な家事の担い手はだれかを調査した。

<結果>

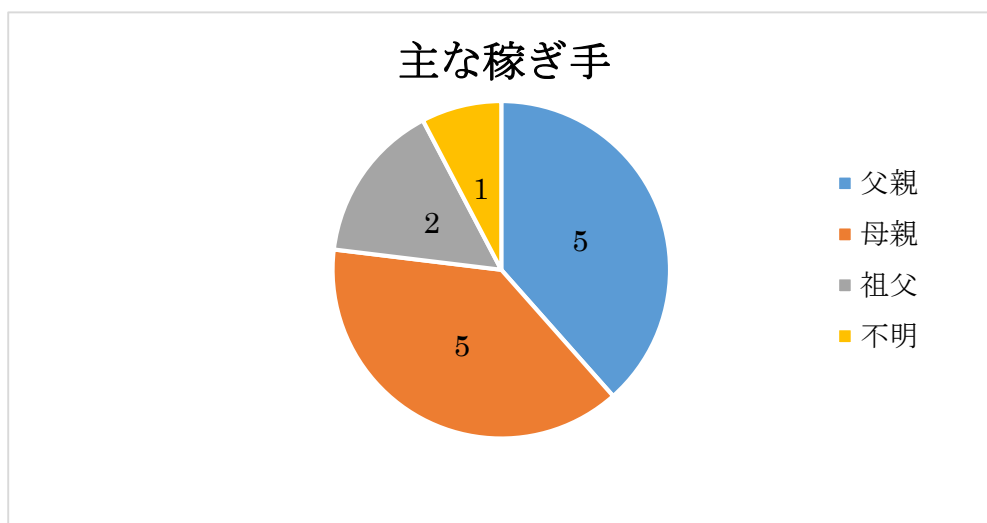
各世帯の人数を調査した結果が以下のグラフの通りである。



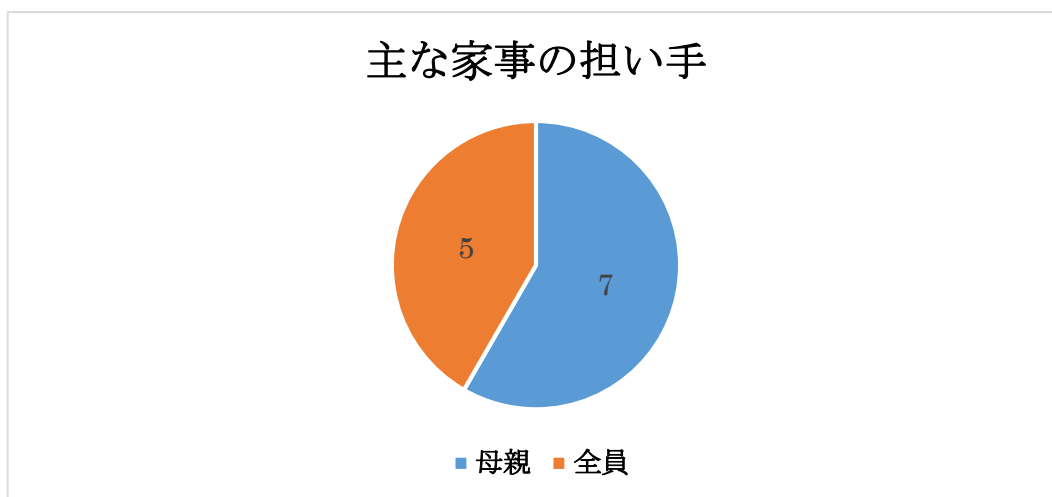
家族の人数が一番少ない家庭は3人、一番多い家庭は9人と大きく差が開いた結果となった。しかし出稼ぎなどの理由でその家で暮らしている実際の人数とは異なることもあった。



次に家庭の中での役割についてである。今回は主な稼ぎ手と家事の担い手について調査した。結果は以下の通りである。



男性が稼ぎ手となっている家庭が多い結果となった。女性が稼ぎ手となっている家庭の中には、男性が地震の被害によりなくなっている家庭もあった。次に主な家事の担い手である。結果は以下の通りだ。



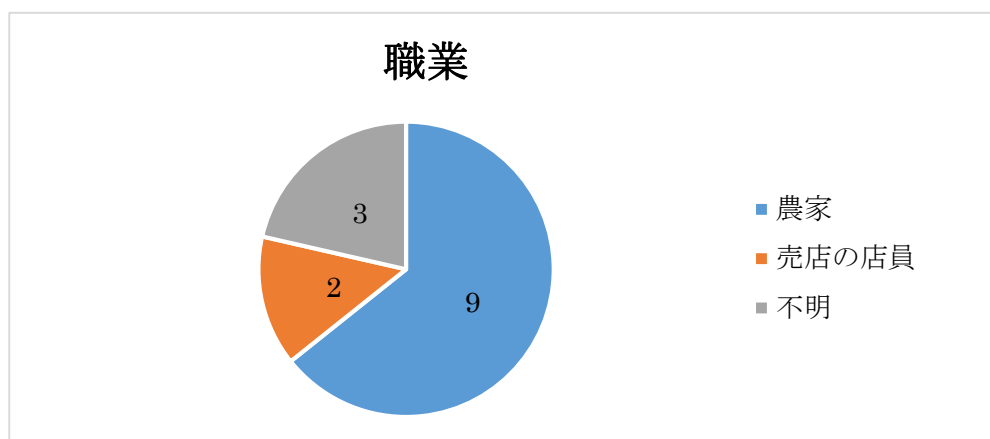
主な稼ぎ手の調査結果とは大きく違い母親か全員の二択という結果になった。男性が稼ぎ手となっている家庭が多いためか家事は女性が行っている家庭が多くみられた。

③ 職業

上の質問で調査した主な稼ぎ手の職業をその家庭の職業としてみなし、調査・集計を行った。

<結果>

調査を行った家庭の多くが農家と回答した。土地の使い方で農業と答えた家庭が100%だったこともこの調査結果と関係がありそうだ。なお、男性と女性において職種の偏りはなかった。



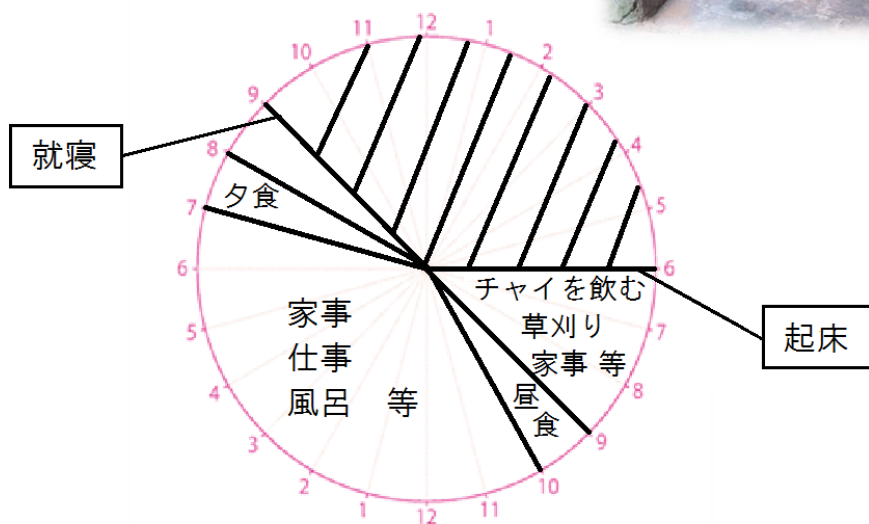
④ 生活スケジュール

1日の村人のスケジュールを知ること、今後のプロジェクトやワークの活動に参加してくれそうな時間帯を把握することや、村人との交流を行える時間帯の把握につながると考え、調査を行った。

<結果>

1日の生活スケジュールを調査した結果多少の時間帯の違いはあったが一日の流れはどの家庭も同じであった。下記の図は村の家庭のスケジュールを平均して1日の流れを作成したものである。

村の家庭では食事は一日に2回とられていた。一度目の食事は上の図に昼食と記してあるが朝食を兼ねた昼食であるといえるだろう。また、日が暮れてからは活動が行いにくいいため日が暮れる前の時間に家事や仕事を終わらせる傾向がある。また、共同の水場が外にあり、そこでシャワーをするため、日中の暖かいうちに風呂を済ませる家庭が多かった。



上の図は主に質問に答えてくれたその家庭での母親や父親の立場である人々の生活スケジュールであり、子供（主に学生）は少し違った生活スケジュールになっている。学校は2部制になっており、朝から午前中にかけて日本でいう中高生の年代の学生たちが学校で授業を受け、その後に小学生の年代の学生たちが学校で授業を受けていた。

中高生の年代の学生たちは学校が終わってからは家の手伝いをやっている人が多かったように感じられた。

これらのことからプロジェクトやワークに参加してくれそうな時間帯は10時から19時までの時間ではないかと考えた。今回の調査で各家庭を周る際にも感じたことだが起床してから食事までの時間は身支度や、食事の準備で手が空いている時間が少なかった。また、この時間帯は10代の若者は学校へ行っていたため学生たちの参加も期待できないだろう。



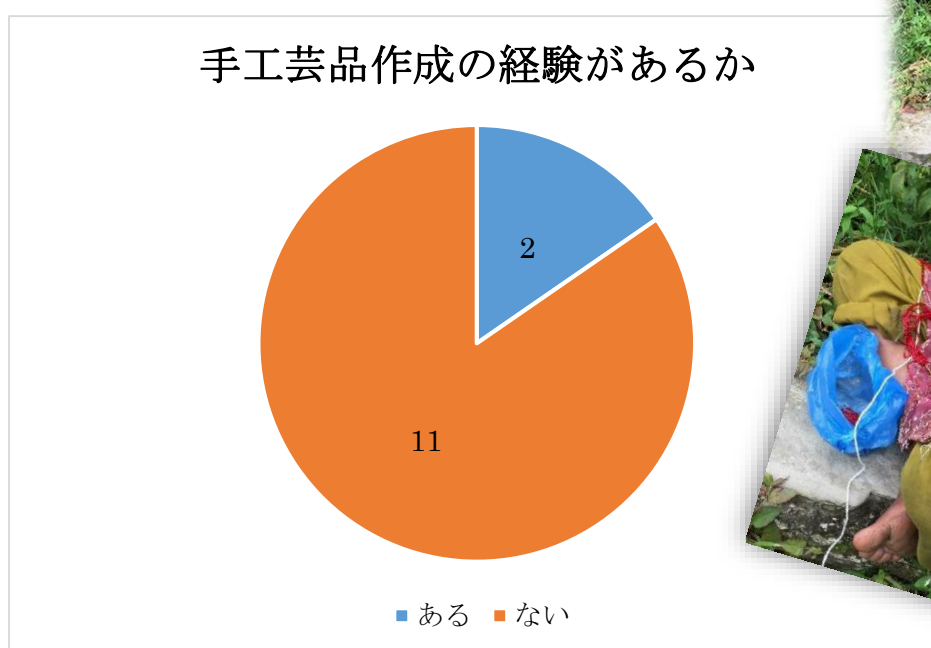
そのため、昼食後から夕食までの時間に村人たちを募って活動を行うことが良いと考える。

⑤ 手工芸品作成の経験について

私たちはプロジェクトにおいて村人と一緒に何か手工芸品を作りたいという思いがあるため、村人はどれだけの割合で手工芸品作成の経験があるかを調査した。

<結果>

手工芸品作成の経験の有無の割合は以下のグラフの通りである。



13 家庭中手工芸品作成の経験があると答えた家庭は 2 件のみであった。しかし、経験がないと答えた家庭の中でも、教えてもらえれば作ることができると思うと回答した家庭もあった。

経験があると答えた家庭に主にどのようなものを作ったことがあるのかを尋ねたところ木製品（ドアや窓など）、竹製品（かごなど）、フェルト製品（帽子や靴下など）、ビーズ製品（ネックレスなど）が挙げられた。



← 〈竹でできた籠〉

日本で売られていたフェルト製品
(ネパールでも同様のものが売られていた)→



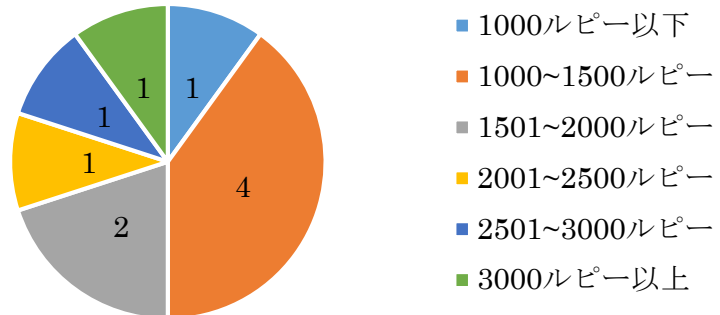
⑥ 1 か月の食事に充てる金額

自給自足率がどのくらいか調査を行うために、私たちは 1 か月で食費に充てる金額がどの程度かを調査した。

<結果>

6000 ルピーと答えた家庭が 4 件、8000 ルピーと答えた家庭が 1 件、9000 ルピーと答えた家庭が 2 件、10000 ルピーと答えた家庭が 1 件、15000 ルピーと答えた家庭が 2 件、未回答が 1 件であった。それぞれの家庭において家族の人数が異なるため、未回答の 1 件を除いた 12 家庭の結果をもとに一人当たりの食費を計算しまとめたものが下に記したグラフである。

1か月の一人当たりの食費



1ルピー=0.9円 (2018年10月現在)

一番低い金額が約 670 ルピー、一番高い金額が約 3800 ルピーという結果になった。このように大きな差が生まれる理由の一つには農作物の種類が関係していた。村の人々は主食として多くの家庭が米を食べているが、米は高価であり食費を高くしている原因である。そのため米を生産している家庭では米を購入する必要がないため食費が低くなるという結果が出た。

● 考察・まとめ

生活状況を調査したことにより、ワークやプロジェクトに参加してもらいやすい時間を把握することができた。村人の生活状況を理解した上で、時間帯や人手を考慮して協力を募れば、もっと村人にとって協力しやすいものになると考える。

プロジェクトの内容については、調査を通して、生活に必要なドアや窓、農作業で用いるかご、そして、帽子や靴下といった衣服を手作りしている家庭があることがわかった。また、多くのネパール人女性が身に着けているネックレスなどのビーズ製品を作っている女性もいた。ワークのソフト面を補填する形でプロジェクトを行っていくためには、ワークの資金調達に関して村人たちに協力を仰ぐことになった場合、村人が作ること



ができる手芸品を利用できるのではないかと考える。村人が実際に付けているアクセサリーや帽子などネパールらしいデザインであり、ネパールの観光地や日本でも売ってあるようなデザインもあることから、日本でもネパールで作った手工芸品を販売することも実現可能なのではないかと思った。

キャンプ中に行ったイベントの中で、実際に村人たちとミサंगाを作った。その時の様子から、プロジェクトで手工芸品を村人たちに作ってもらい販売することができるかを検討したところ、製品の品質を考慮すると販売することは難しいと考えた。しかし、村のお母さんたちや若い女性たちを中心に、ミサंगा作りに対して興味を示し積極的に作ろうとしてくれた人や器用な人が多く簡単な説明で作ってくれたりデザインを変えたりしていた人がいた。このことから、村人たちに趣旨を説明し販売に対する理解を得たり、試行錯誤を重ねたりすることができれば、販売できる手工芸品を作ることができるのではないかと思った。また、これから実際に作っていく手工芸品を決めるときには村人自身のアレンジや意見を取り入れたものを作っていきたいと考える。理由は、日本製とは異なったネパール製の雰囲気を出せること、そして、村人とともに製品開発を行うことで主体的に取り組みたいと思えるきっかけにしたいからである。

今回のキャンプでは日常生活やイベントで大人の女性たちと交流する場面があったが、私たちが考えているプロジェクトのことや、春にこの村人を中心に手工芸品を作ってもらって販売し、少しでもその利益をグンバの建設の費用として用いたいと考えていることを全く伝えていなかったため、伝えておくべきだ



ったという反省があった。村人たちが理解していないままプロジェクトを始めると一時的なものになってしまうと考えるため、趣旨を上手く伝え、村人の意思で手伝ってもらえるようにしたい。そして、グンバが完成して自分たちが村での支援を終えることになった後も、グンバの管理を村人たちが引き継ぎ、村内で役割や資金が循環していけるようなプロジェクトをしていきたい。

9. イベント報告

8月25日(土)「日本食パーティー」

プログラム

- ①ジェスチャーゲーム
- ②日本食パーティー
- ③ミサンガのワークショップ



①ジェスチャーゲーム

食事の前に手巻き寿司パーティーの準備が完了するまで用意していたジェスチャーゲームを子供たちと行った。シャイな子供たちが多くジェスチャーが上手くできないこともあったが、楽しそうにゲームをしてくれた。

事前に絵とネパール語と英語を書いた紙を用意し、それを用いてゲームを行った。



②日本食パーティー

村の人々に手巻き寿司と味噌汁を振る舞った。

手巻き寿司の米は現地で購入した米を炊いてもらい、味噌汁の材料や手巻き寿司の具材などは日本で購入したものを使用した。



日本から持参したもの↑



手巻き寿司は日本で購入した缶詰を具材として用いた。

子供たちはみんな列に並んでくれたため海苔を配ったり米や具材を乗せて、海苔を巻いたりする流れ作業でスムーズに行うことができた。味の好みは人それぞれでさまざまな反応を見ることができた。

③ミサンガのワークショップ

日本食パーティーの後はミサンガ作りのワークショップを女性中心に行った。糸は現地で購入したものを使用した。ミサンガの作り方を教えながら行ったところ、とても楽しそうに作ってくれた。子供たちだけでなく村の大人達とも交流ができ、たくさん話をすることもできた。出来上がったミサンガを日本人とネパール人が交換して身につけている姿も多く見られ、笑顔が溢れる時間となった。



なお、この時間と並行して子供達には日本から持参した、しゃぼん玉を渡し一緒に遊んだ。しゃぼん玉はとても人気でシャボン液がなくなった後も石けんを水で溶かしてしゃぼん玉をしている子供達もいた。

● 反省

- ・グンバを明るい雰囲気にするためにかざりつけを行ったが、うまく壁や天井に飾りを貼り付けることができず、時間がかかってしまい当初予定していた通りにはいかなかった。
- ・子供達はシャイな子が多かった。よく遊びに来てくれる子供達はジェスチャーゲームを楽しそうに行ってくれたが、初めて会った子供達はジェスチャーをするのも恥ずかしがってうまく進まないことがあった。
- ・もともとジェスチャーゲームを2番目に行う予定だったが、日本食の準備が遅くなってしまい順番を変更して行うことになり少しばたついてしまった。
- ・しゃぼん玉は子供達の中で取り合いになってしまったためルールを決めたり数をもっと用意したりするなど数に限りがあるものに対する対処を考える必要があった。

● 総括

朝から雨が降っていたにも関わらず老若男女問わず多くの人が集まってくれた。これは事前にチラシを配って宣伝をしたり、前日にもう一度村を周ったりして広報活動に力を入れたことが効果的だった。

また、ワークの働き手となる人々とも親睦を深めることができたため春に繋げることができたと思う。

グンバの飾り付けは大変だったが、雰囲気が明るくなり、イベントを盛り上げるきっかけにもなった。

そして、ミサンガのワークショップはこれからプロジェクトを行っていく上で参考になるのではないかと思う。

集まってくれた人達はとても楽しそうにっていて、村の人たちとの親睦も深められたため今回のイベントは成功だと考える。

次回はより、男性にも楽しんでもらえるイベントを行いたい。



<飾りつけの様子>



<広報活動で使用したチラシ>



10. KP より

村での朝の起床時間は、その日の予定によって前日のミーティングで決定し、だいたい 6 時 30 分から 7 時 30 分の間です。あらかじめシフトによって決められたその日の KP 2 人は、ほかのキャンパー達より約 30 分前に起床して、ホームステイ先のママが淹れてくれるお茶を運んだり、料理の手伝いをしたりします。ママが作ってくれるタルカリというネパール料理には、毎日たくさんの野菜が入っているので、料理の手伝いは主に野菜の下ごしらえです。日中、ほかのキャンパーが休憩したり、visit をしたりしている間に、洗濯とごみの焼却を行います。洗濯は村にある共同の水場で行い家の前に干すのですが、私たちがキャンプをした 8 月、ネパールはちょうど雨季だったので洗濯物がなかなか乾かなかったり、雨に濡れてしまったりすることがよくありました。共同の水場は、私たちが村を訪れた際、コケがびっしり生えており大変すべりやすい状態だったので、コケを除去する作業なども行いました。

キャンプ全体を通して、キャンパー全員が自分のシフトに責任をもって取り組むことができました。また、洗濯ものが多い際などは、手が空いているキャンパーが、進んでその日の KP の援助をする場面が多く見受けられました。次回のキャンプでも、その日の KP を中心にみんなで作業をする姿勢を大切にしていきたいです。

11. 保健係より

● 仕事内容

〈日本にいる間〉

- ・海外保険の書類、保険カードの管理 ※1
- ・破傷風、A 型肝炎、日本脳炎の予防接種の推奨 ※2
- ・アレルギーや持病の把握
- ・保健バックの中身の確認、補充

※1：海外保険は FIWC 九州の安全対策のルールとして、参加者全員が治療費用 2000 万円以上、その他傷害、過失、疾患等の保険内容に加入することになっている。

※2：これら 3 つの予防接種は FIWC 九州の安全管理の面から、接種することを特に推奨している。

〈ネパールにいる間〉

- ・毎日キャンパーの健康チェックをする。
- ・怪我の手当て、病気の予防
- ・保健バックの管理

● 日本から持参したもの

- ・カット綿 2袋：消毒に使用。使いたい分だけ切られるので便利だったが、大きいので持ち運びがしにくかった。
- ・冷却シート：個人で持っている人が多かったので、足りなくなるということはない。
- ・スポーツドリンクの粉末：発熱時に使用。量は十分だった。
- ・経口補水液：発熱時に使用。脱水症状の予防。
- ・クレベリンミニスプレー：部屋の虫除け。
- ・防水フィルム：傷口を水やばい菌から守る。
- ・バンドエイド：切り傷、擦り傷等に使用。
- ・サロンパス：足を捻挫した時に使用。
- ・スキングードミスト：虫除け。サラテクトを主に使用したので使わなかった。
- ・サラテクトミストリッチ30：虫除けスプレー。外出する際は必ず使用。
- ・ムヒ：虫刺され時使用。
- ・マッキンゼット、殺菌消毒薬：怪我した時の消毒に使用。
- ・手当用の包帯、テープ：傷の手当て。

〈お薬〉

- ・ザガードコーワ整腸剤：お腹の調子が悪い時に使用。よく使った。
- ・第一三共胃腸薬：胃もたれ時に使用。使用しなかった。
- ・バファリンA 解熱鎮痛剤：発熱時や体の痛み。使用しなかった。
- ・正露丸：下痢、食あたり時に使用。使用しなかった。
- ・総合感冒薬：喉の痛み、発熱、鼻水などの症状の際に使用。よく使った。
- ・酔い止め：必要な人は個人で持ってきていたため使用しなかった。
- ・便秘薬：長く便秘気味だった時に使用。
- ・イブクイックA：頭痛時に使用。使用しなかった。
- ・バンテリン筋肉痛滋養強壮剤：筋肉痛に効く。使用しなかった。

〈備品〉

- ・マスク：個人で持ってきていたため保健バックにあるものは使用しなかった。
- ・体温計：使用した。

- ・ピンセット：棘を抜く際に使用。使用しなかった。
- ・爪切り：使用した。個人では持ってきていなかった。
- ・ハンドジェル：ウェットティッシュがない時に使用。
- ・エマージェンシーシート：寒くなかったので使用しなかった。
- ・イソジン：喉を痛めた場合に使用。使用しなかった。

〈今後必要ではないと思われるもの〉

- ・イソジン：前回、今回と使用しなかったので必要ではないのではないかな。

〈今後必要であると思われるもの〉

- ・ビタミンCや鉄分が摂取できるサプリや飲み物：貧血ぎみになった人がいた。また、栄養が偏っていたため。



〈個人で持参したもの〉

- ・ビオフェルミン
- ・マスク
- ・冷えピタ

● 現地での病院について

～場所～

〈バルビシ（村に最も近い町）〉

- ・病院名：Bahrabise helth post
キャンパーが目にもものもらいのような症状が出た際、パネちゃんが連れて行ってくれた。政府の病院だったため費用はかからなかった。塗り薬をもらった。

〈カトマンズ〉

- ・病院名：Om Hospital&Research Center
- ・電話番号：447-6225
38度以上熱がでた時に病院に行った。カトマンズの私立の病院でパネちゃんが連れて行ってくれた。飲み薬をもらった。



● 総括

良かった点

- ・ 個人で薬やマスクを持ってきていたため不足するということがなかった。
- ・ 一人一人が安全マニュアルの事項をよく守っていたため、大きな病気、怪我に繋がらなかった。
- ・ 毎日健康チェックし、キャンパーの健康状態を把握することができた。
- ・ 保健バッグから使用した物、薬を記録できていた。
- ・ 一人一個ウエットティッシュを持ってきていたため、外出先でも必ず誰かは持っていた。

反省点と改善点

- ・ 外出する際に、虫除けスプレーをしっかりと足につけることができていなかったためヒルによく噛まれてしまった。
→徹底していた人は噛まれなかったそうなので次回は足まで必ずスプレーをするようにした。
- ・ 今回保健バッグが2つになり、1つが上にチャックがなかったため手荷物とってしまった。そのため、液体のものが、没収されてしまった。
→チャック付きのバッグを買い、手荷物にするときには注意する。
- ・ 外出する際に個人のバッグに絆創膏や消毒を入れていた。
→小さめの外出時のための保険バッグを準備し、別れて行動するときは必ず誰かは保健グッズを持つように徹底する。そのときにトイレットペーパーと黒い袋も携帯することを忘れないようにする。

12. 会計報告

● 換金

8/10(金) ¥10,000 → Rs9,630

8/10(金) ¥350,000 → Rs341,250

8/31(金) ¥64000 → Rs64,320

※現地通貨はルピー(rupee, Rs)

※換金時のレート：1Rs=0.96~1.01 円

● 支出

項目		金額(NRs)
宿泊費	銀杏旅館・カトマンズホテル費 ※1	72,895Rs
	村での滞在費	25,000Rs
食費	朝・昼・夕食費	80,500Rs
	水 ※2	910Rs
移動費		97,500Rs
通信費 ※3		7,150Rs
医療費 ※4 ※5		1,715Rs
エンジニア代		6,000Rs
コーディネーター代		78,000Rs
合計		369,670Rs

※1：銀杏旅館には全員で一泊したが、体調不良者がでたため本人を含めた二人が一泊延長した。

※2：水は個人で買うこともしばしばあった。

※3：通信費は現地で購入した SIM カードおよびリチャージカード代である。
また、携帯電話についてはキャンパーが私的に持っていたスマートフォンを使用した。

※4：バルビシの病院は政府の病院で治療費がかからなかった。

※5：カトマンズでの病院で支払った医療費・診察代・薬代。

● 収入

生活費：400,000 円(キャンパー1人につき 40,000 円)

● 総括

<反省点>

- ・ パネちゃんに、前払いをしてもらっていたこと。
- ・ 移動費を最後にまとめて支払ったことで、パネちゃんに負担をかけてしまった。

<改善点>

- ・ 移動費は必ず当日に支払う。

<良かった点>

- ・ 支出があった日は、毎回会計ミーティングをしていた。
- ・ 領収書をお店からもらえてしっかりそろえることができた。
- ・ 時系列ごとに整理できた。
- ・ お金を会計二人で分けて持っていたため一人が大金を持つことがなかった。

● 参加するにあたってかかる費用について

ここでは、キャンプに参加するにあたって、一個人がかかった費用の例を示す。

項目	金額(円)
キャンプ参加費 ※1	2,000 円
航空券代 ※2	70,000 円
生活費	40,000 円
土産代	5,000 円
合計	117,000 円

※1：FIWC九州の規約に則り、キャンプに参加する度に¥2,000を納める。

※2：往復分の手段。ルートは福岡→青島/上海浦東→北京/昆明→トリブバン

13. ネパールでの生活

【朝】

ネパールの朝は早く、村人は 4:00～5:00 に起床します。日が昇ってくると鶏、山羊、水牛などの家畜が元気に鳴きはじめ、キャンパーも寝袋からもぞもぞと這い出てきます。

朝の日課はママが淹れてくれるネパールのお茶、「チャイ」を飲むこと。ジンジャーが効いたあつあつのチャイで、心も体も温まります。



【昼】

村の大人たちは、田畑を耕したり、草を刈ったり、各々の仕事を始めます。キャンパーは、visit をしたり、春のワークキャンプに向けての準備をする合間に、お風呂に入ったり洗濯をしたりします。「え？昼間にお風呂に入るの？」と思いませんか？じつはそれしか方法がありません。お風呂といっても左の写真にあるように出てくるのは水ですので、夜に入ったら凍え死んでしまいますから…。この写真は共同の水場で、ここで洗濯も行います。



10:00～12:00 頃に、ご飯を食べます。ネパールでは 1 日 2 食が一般的。その 1 食目です。ここで、有名なネパリフードたちをご紹介します！

ダルバート・タルカリ →

ママが毎日の食事で必ず作ってくれる伝統的なネパール料理。ダルバートは、皿の中央にある、お米に豆のスープをかけたもので、タルカリは右上と左上にある日本でいう野菜炒めのような料理です。お味は...とってもおいしい！みんな毎日おかわりして、おなかいっぱい食べました。





← モモ・チョウメン

お店に行くと食べることができる。写真の上部においてあるのがモモで、下がチョウメン。モモは、餃子のような料理で、水牛肉でできたもの、鶏肉でできたものなど何種類もあり、中にはチーズモモという変わり種も。みんな大好きで、「日本に帰ってからまたべたい！」というキャンパーもいました。チョウメンは、色は茶色いですが味は塩焼きそばに似ている料理でこちらもモモと同様にいくつか種類があります。多めの油で炒められたカリッとした麺がおいしい！こちらもキャンパーに大人気でした。

トウクパー

前回のキャンプに参加された先輩方でも、もしかしたらこの料理はご存じないのではないのでしょうか...！村人が案内してくれたお店で出会った冷やし麺料理です。麺はうどんのような麺ですが、スープはスパイシーで、エスニック好きにはたまらない一品！



夕方頃になると、学校を終えた子供たちが遊びに来られます。キャンパーが日本から持ってきた折り紙やトランプ、シールなどの遊び道具に子供たちは興味津々！折り紙を渡すと、キャンパーが教えたわけではないけれど花や紙飛行機を折ってくれました。日本のババ抜きなどの簡単なトランプゲームは、子供たちはすぐ覚えてくれて言葉の壁を気にせずに楽しく遊ぶことができました。「かごめかごめ」などの日本の伝統的な遊びも気に入ってくれました。



左の写真は、作業のために持ってきていたゴム手袋を膨らまして風船のように

して遊んでいる風景です。パワフルで、創造力豊かな子供たちはいつも私たちが笑顔にしてくれました。

19:00～20:00 頃になるとご飯を食べます。夜ごはんもダルバートタルカリを食べて、キャンパーはミーティングを行って 21:00～22:00 頃には就寝します。雨季のネパールでは夜通し強い雨が降ることもしばしばでしたが、雨の音で寝れない！というようなキャンパーはおらず、みんな元気ないびきをかき、隣の人を蹴ったりよだれをたらしたりしながらすやすや眠りました。

14. その他の活動

(観光、JICA・UN Habitat 訪問)

～観光～



スワヤンブナート(Swayambhunath)

カトマンズにあるネパール最古の仏教寺院。ユネスコ世界遺産に登録されている「カトマンズの渓谷」の一部。メインのストゥーパ以外にも大小様々な仏塔がありました。そしてサルが多い！至ることにサルさんがいます。可愛いけど、注意しないと食べ物や持ち物を奪われます。また、カトマンズの街並みを一望できました。すごく見晴らしがよかったです！

ボータナート(Boudhanath)

カトマンズにあるネパール最大のチベット仏教の巨大ストゥーパ。こちらも世界遺産の「カトマンズの渓谷」の一部。ストゥーパの周囲には360度、見渡す限りお土産物屋さんが並んでいました。すごくきれいな景観です！ここでは時間をとって三班に分かれて、カフェやお土産物屋さんを楽しみました。でっかいストゥーパの前で、みんな写真も撮りました！！





タメル (Thamel)

カトマンズの中心部にある世界中の旅行者が集まる観光地。タメルのホテルに泊まったため、じっくりタメルの街並み、レストランやお土産屋さんを楽しめました。毎日ダルバートタルカリだったキャンパーにとって日本食も食べられる最高の場所でした。少し離れたところには小さな寺院もいくつかありました。寺院を無料で案内するよ、という現地人のぼったくりには気をつけましょう。

ファン・パーク (Kathmandu Fun Park)

タメルから少し行ったところにある遊園地。みんなノリノリで到着しました。高速回転する観覧車や、ただただ重力に耐えて回転するイスに酔いやすいキャンパーはやられました。もっと優しさのある乗り物を選ぶべきだったのかもしれません。それでもみんなで遊園地に来ることができて、すごく楽しんだようです！



～JICA 訪問～

8月31日に独立行政法人国際協力機構 JICA のネパール事務所を訪問しました。様々なプロジェクトをネパール各地で行われていて、為になるお話をたくさん聞くことができました。長年ネパールに住んでいるからこそわかるネパールの現状を詳しく教えていただきました。2015年に発生したネパール大地震の際の体験談も聞くことができ、改めてネパールについて考え、学びました。また、私たち FIWC 九州の課題でもある安全対策マニュアルについての相談にもものっていただき、質問にも答えていただきました。私たち学生団体ができる

ことを考えるためには様々な角度から物事を捉えて考えることが重要であると実感しました。JICA で教えていただいたことをしっかりと共有し、今後のワークキャンプに活かしていきます。この度は貴重なお時間をありがとうございました。



<質問と回答 一部抜粋>

Q. ネパールと日本の建築基準には違いがあるが、兼ね合いはどのようにしているのか。

A. 日本を参考にするなどして、ネパールの建築基準に足りないところを補う。近年発展しているインドを参考にすることもある。

Q. 学生団体にインフラの整備などの大規模なワークをするのは身の丈に合っていないのではないのか。

A. インフラの整備にも方法はたくさんある。学生団体のため資金の面では難しいかもしれないが自分の労働力を生かすなどの方法がある。

Q. 建物を建てたあと、点検や調査、修繕は行なっているのか。

A. JICA では1年の保証期間がある。また、現地で手に入る材料で造るなどして JICA が離れた後に自分たちで修繕できるような工夫をしている。

他にもたくさんの質問に答えていただきました、ありがとうございます。

～UN HABITAT NEPAL OFFICE 訪問～



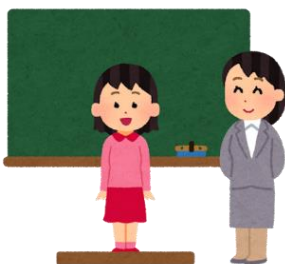
UN HABITAT NEPAL の方からお話を伺えることになり、UN HABITAT の事務所を訪問した。

UN HABITAT (国連ハビタット) とは国際連合人間居住計画という団体で“**For a better urban future**”を目標にしている。世界各地で急速な都市化が進行している発展途上国において、都市部に生活する

人々の居住問題が深刻化していることを課題とし、都市化や居住に関する様々な問題に取り組む国連機関である。

今回私たちは、国連ハビタットがネパールで行っている活動のなかで震災後の復興支援活動である学校の再建や、村と町のつながりを作るプログラム、水の衛生管理についてのプログラム、さらに村にトイレを建設するプログラムなどについて聞くことができた。国連ハビタットの方針として、「してあげるのではなく現地の人々を教育して活動の促進を図る」ということがあり、実際にトイレの建設の際に、資金の提供ではなく、作り方や作る必要性を教えて現地の人々が自ら作るよう促したというお話が聞けた。

また、福岡の方と協力して水をきれいにするプロジェクトを行ったお話を聞くこともできた。国連ハビタットでは **Water for Asian Cities program** や **Water&Sanitation** など水の問題に取り組んでいるプロジェクトが多くある。その中の一つとして水質改善の為の活動では福岡の方と協力して行ったそう。実際に使用した薬品を見せていただくこともできとても貴重な経験になった。



さらに、国連ハビタットで行われている活動のお話だけでなく、そのような活動を行っていく上での注意点や私たちの活動の改善点になるようなお話も聞くことができた。何をやるのか何をできないのかを先に前もって伝えることが、村人と協力してプロジェクトを行っていく上で大切だということ。何かを作ったり金銭的な支援をしたりすることも大切だが、作る必要性や作り方を教えて本人たちに自

発的に活動してもらうことのほうが、持続性があり良い活動になるというお話を聞いたことは、春のキャンプやこれからの活動に活かしていくべきことだと思った。



15. 他己紹介

優大

人懐っこく明るく自由なみんなのプーさん枠。コーディネーターのばねちゃんのことが大好きで夜寝るときには「ばねちゃんの隣で寝たい！」といいばねちゃんの隣を譲らなかった。涙もろい一面があり村を出る前日やばねちゃんとの別れの際に号泣していた。TWICEの曲をかけてかすみと踊っていた姿がとても印象的だ。がんばれ副リーダー！by まき



陽向

天使。笑顔と優しきでみんなを癒してくれましただけでなく、保健係と会計係という大変な仕事もこなし、キャンプを支えてくれた縁の下の力持ちでもあります。子どもたちにも村の人にも好かれていたね！ひなたがいてくれたおかげで私もたくさん救われました。一緒にキャンプに行けて本当に嬉しかったです。来てくれてありがとう！by あいり





真衣

ミーティングの時とか常に自分の意見をしっかり持っていて、ドストレートに言ってくれる。そんな真衣は意見を求められる場でみんなから信頼されている。KP として毎日のように洗濯やママの手伝いをやっていて、しっかり者だなと何度も思われました！食事のときママの隣でよく大根を切ってくれましたね。そして無限の胃袋でアキアキ！アキアキ！と言いながら笑顔でたくさん食べてくれました。そして何より真衣の笑顔はネパールのおばちゃんたちのハートをしっかり掴んでいるようでした！by ゆうか



佳澄



金髪美人のかすみさんは英語が堪能で、トランジットの際などはとっても頼りになる存在でした！かすみさんリスペクトが止まらなかったです！「かすみさん他人に興味ない説」が浮上してはいますが、かすみさんとする何気ない会話がとっても面白くて、楽しかったし、恋バナする時のかすみさんはとってもかわいかったです♡これからもかすみさんリスペクトスタイル（シャツをズボンにイン）貫いていきたいです。by まい



大川

特技はどこの国にいても現地人化することと人の不安を必要以上に煽ることである。『よ！人望の厚いリーダー！』とおだけると多分何でもしてくれる。MTG で行き詰まってしまったり、内容が重い話し合いになったりしたときも程よい緩さで引っ張るのでピリピリせず、良い雰囲気 MTG が進む。感謝！！春も頼りにしています！！by かすみ



裕也



とても発言力があり、いつもしっかりとした自分の考えを持っている。そしてなにより周りのことをよく見ている。いつも感心することばかりで、とても尊敬しています。ゆうやさんがいないとネパールキャンプは成り立ちません！また、ネパールと中国を経験しただけあって村人との交流の仕方がすごく上手い。見習わなければならないことがたくさんありました。by ゆうだい



愛理



よく食べます。よく村の子供と私たちのお世話をします。よく笑います。微笑みの神さまです。あいりさんといると心がほっこり。そばにいるだけで心がほっこり。大川さんとは熟年夫婦のよう。いいですね。2人のバランス、絶妙です。これからも私たちを温かい眼差しで見守っていてください。by えりこ



真輝



見た目はクールで美人、中身はキンプリ好きとても女の子。キャンプ中まきのリュックからはこどもたちが喜ぶものからキャンパーが喜ぶものと次々と出て来てその女子力の高さに圧倒されました。大川のズボンを縫ってあげたり、寒そうにしている人がいればスーブをだしてあげたりと、よく気がつき行動する姿はとても素敵でとても尊敬しております。by ひなた



恵理子

初の海外に加えて、キャンプの仲間も出会ったばかりの人たち。人見知りだと言っていたこりえにとっては、不安だらけだったでしょう。しかし、後半に「久々にここを開いた」と言った時、楽しめたのだと安心しました！パネちゃんのことが大好きでいつもくっついて行動しており、お別れの際も号泣

し、なかなかパネちゃんから離れませんでした笑笑

パネちゃんと会うことができる春キャンプ、早く来るといいね！by おおかわ



優佳

彼女は西南英語専攻のゆうか。FIのイベントによく来てくれるかわいい後輩だ。カトマンズと一緒に観光したときは、ぼったくられたりいろんなことが起きたが次回はそんなことがないといいね！そしてキャンプで彼女の隣で寝るときは要注意！！彼女はとても寝相が悪いから((笑))by ゆうや



16. 感想

大川峻右（西南学院大学経済学部2年）

「もう一度、ネパールに一月行く」というと周りからは、「また？」とか「なんで？」と言われることが多い。確かに、この豊かな日本で生活している人からすると、日本から遠く離れた、途上国と言われる国に一月間も行くことは不思議に思うだろう。しかし自分は知識欲にかられて二回目のネパール行きを決断した。前回は初めての海外であった自分は、そのときの経験から多くの学びを得ることができた。何もかもが新鮮で、不思議なことが多くあったからだ。そのとき自分は、もう一度ここへ来ると、何を考えるのだろうか、今とは違う感情を抱くのだろうかと思った。

そうして今回、もう一度村を訪問したわけだが、カトマンズから4時間かけて到着した村は、同じ村と思えなかった。自分の記憶の中の村と違っていたからだ。風景も、気候も、様々なことが違っていた。雨季の村はトウモロコシだらけ、地面にはぬれた草が生い茂り、ほとんど毎日雨が降っていた。

虫が極度に苦手な、雨が降ると気分が沈む自分にとって大変なわけだが、それだけ環境が違えば、村での生活も変わる。近くの都市に行くまでの道も、土砂崩れで崩壊しており、車が通れなかった。ほとんど毎日雨なので、遠出も難しい。洗濯物を干すにもいつ雨が降るかわからないので、用心が必要だ。また、危険なことも増えた。家の周囲の階段は、雨水とコケでとても滑りやすくなっていた。村の人でさえも転ぶほどだ。肌を露出して道を歩くと、ヒルが襲ってくる。今回のキャンプでは10人中8人噛まれた。

これだけ環境が違うことで、2回目のネパールでも新たな気づきがたくさんあった。季節が違えば、村の人が直面する問題も変わった。通年様々な問題に見舞われていて、改めて大変な場所だと感じた。解決すべき問題があまりに多くあるように感じて、もし自分がこの村の人だったら、何から手をつけたらいいのか分からなくなってしまいそうだ。

村で生活すると、このように問題はたくさん起こる。村の人もそれを認識している。

しかし、村の人たちは日々に満足しているようだった。今回の訪問も、村の人々は温かく迎えてくれた。夜ご飯どきにお邪魔すると、ご飯をご馳走してくれた。また、村の人たちの遊び場や、お気に入りの商店など色々連れて行ってくれた。村の滞在が2回目ということで、村の人との仲も深まってきて、前回できなかった経験も多くすることができた。前回の活動について、感謝を述べてくれたり、今回はより協力したいと言ってくれたりと、一度活動をした実績があることで、私たちのことを少し信頼してくれているように感じた。村を変えず、同じ村で活動を続けることの良い点を実感することができた。

こうして改めてネパールでの活動について思い返すと、まず出てくるのが楽しい思い出。村の人々の親切さや、笑顔、一緒に笑い合える生活がある。

自分がもう一度ネパールで活動するのはこの生活があるからだ。

こう思えるのも、村の人や、この環境を作ってくれた先輩方、キャンパーのみんながいたからだ。自分はこの感謝の思いを忘れず、今回の反省点と向き合って、これから本キャンプに向けての活動に臨みたい。

寺田愛理（九州大学農学部2年）

2回目のネパール。なぜ今回もネパキャンに参加しようと思ったのか、よく聞かれるのだが、理由は大きく2つだ。

1つ目は、ネパールと村、そしてそこに住む人々が好きになったからである。日本で普段生活しているときは感じるができない、のどかでゆっくりと流れる時間。ママの料理の準備を手伝ったり、お互いに拙い英語で子どもたちと話したり、日本では随分と経験してい

ない心休まる時間だった。そして、今回のキャンプでは、前回の滞在より多くの村の人たちと関わることができたと思う。GAMにも初めて参加し、村の人たちの話を直接聞くことができたことで、よりグマンマニサワラの村や人々について知ることができたのではないかと感じた。

2つ目は、1回目のキャンプでは、下見キャンパーや先輩たちについていっただけだったと感じたからだ。特にワークに関しては知識もなく、スキルワーカーに言われたことや先輩を見てワークをしていた。ワークだけでなく、移動や生活においても私は先輩がいるから、と安心してた。しかし、せっかく参加したからには、自分でも考えて動きたいと思うようになったため、再び参加することを決意した。今回のキャンプでは、自分が想像していたよりも移動や生活において安全面をはじめとした私たちオールドキャンパーの責任が大きかった気がした。出国のとき、それまで言葉としてしか認識していなかった不安を実感した。引っ張って行く立場になって初めて気づいた、注意すべき点や想定が数多くあった。この経験を、次の春のキャンプだけでなく、今後の自分の成長のために活かしていきたいと思う。

また、今回のキャンプでは、ワークだけでなく、プロジェクトという新たな取り組みを始めることになった。初めてのことで右も左も分からず悩むことも多いが、JICAを訪問した際に、震災支援においてハード面の支援だけでなく、今後はソフト面、主に生計をいかに立てていくかということに着目した支援が必要だという話を聞き、手探りでもやってみようと思えるようになった。ソフト面の支援というのは、村人からの理解を得ることが重要だと考える。そして、すぐに解決できるものでもないと思う。私たちにできることは小さいかもしれないが、少しずつ時間をかけながら、取り組んでいきたい。

そして、新キャンパーが多く、みんなの不安も大きかったかもしれない。私は、その中で適切に不安を解消できるように接することができていたか自信はない。しかし、みんなが楽しそうに村の人々やコーディネーターのパネちゃんとお過ごしている様子を見ることができてとても嬉しかった。春は下見キャンパー全員で、春から参加するキャンパーを支え、楽しみつつ、キャンプに臨みたい。

洲崎裕也（西南学院大学人間科学部2年）

私はこのキャンプで4回目になる。チャイナが2回とネパールが2回である。そもそも今年度は日本でしたいこともあったのもうキャンプに行く予定などなかった。しかし前回からの引継ぎが2人しかおらず、ワーク、プロジェクトのどちらかのリーダーを新キャンパーに任せるのは重荷だと思い参加したのである。私はネパキャンの中で唯一キャンプを3回経験しており、ネパキャンの中で誰よりもキャンプに参加している。けれど私は3回もキャンプに参加していながら、「なんでまたキャンプに参加しているのだろうか?」「一体何をしに来たのだろうか?」と考えてしまう事がある。

だがこのキャンプを通して私は何度もキャンプに参加してしまう理由を見つけることが出来たのかもしれない。

それはキャンパーの皆とキャンプがするのが楽しかったり村人と酒を飲んだり、共同生活をしているのが楽しいと感じたからだ。これは他のキャンパーなら初キャンプで感じるものかもしれない。だが私は4回目にしてようやく感じる事が出来た。キャンプ中は全然気づけなかったが日本に帰国してみて痛いほどキャンプが楽しかったものだと感じた。みんなと約1か月近く生活して嫌という程顔を見てきたけど帰国するとさびしく感じてしまう。滞在中、早くかえって残りの夏季休暇を日本で楽しみたいと思ってしまった自分がバカだとさえ思う。もっと村人と飲みにケーションをすればよかった。

パネ氏と別れる時も少し寂しい程度だったが帰国した今では早く会いたいと思う。

話は変わるが、今回私は役職なしのキャンパーとは違いワークリーダーという責任の重い役職を担っているつもりだ。ワークリーダーは大変であることはわかっていた。下見中も事前MTGで計画していたワークを行おうと考えていたが、ネパールではそんなものお構いなしに計画が変更になってしまう。だから本来は、小規模ワークにする予定が中、大規模ワークになってしまった。このワーク規模が自分のキャパを超えていることをしている感じがしてキャンプ中は逃げ出したいくてたまらなかった。

だがネガティブなままではリーダーとして、そして先輩としてみっともないと感じた。そこでこのワークが成功した時のことをイメージするよう心がけるようにしようと思う。そうすることによって、逃げ出したいと思うような事がなくなるのではないかと思ったからだ。今まで人前に立ったこともないためリーダーという仕事をこなすのは苦勞するかもしれない。しかしこれを克服することにより、自分が変わることを期待する。

そして次回春キャンプに参加しようか迷っている方は是非ネパールに来た方がいいだろう。ネパールという国が色々ぶっ飛びすぎていて面白い国だからである。

私もネパールで色々経験した。ここで話したいが興味のある方は自身で経験してみよう！ワークもコミュニティハウスの壁と階段を作ります！是非皆さんの参加待っています！！

友松陽向（西南学院大学人間科学部2年）

キャンプに行くまでの1年間は、キャンプに行った先輩方や同期の子たちから話を聞いてキャンプとはこういうものなのかなと想像することしかできませんでした。行きたいと親に伝えたとき、日本人が行くことでその人たちに任せたらいいやと思われ、その村の自立促進につながらないのではと言われました。行ったことがなかった私にとってはなんと返答すればいいのかわかりませんでした。先輩方に相談をし、親を説得するために答えを頂いたりしました。答えを聞けたらもういいのかなと諦めかけそうになった時もあったのだが聞いていく中で、やはり自分でその答えを見つけたいという思いが強くなり、何回も話

をして、行くことを許してもらいました。そしてその場所をネパールにしました。海外に行ったことがなかった私にとっては、ネパールと言う場所は全く想像がつかず、こんな感じなのかなという推測と聞いた話から想像しながらミーティングに参加しました。

ネパールで村に着くと、村の方々は私たちを歓迎してくれました。村に visit に行くと果物を切ってくれたり、お茶を出してくれたり、覚えたネパール語だけで話をしたりしました。なんと言っているのかわからなかったことが多かったが一緒に笑い合うその瞬間がとても幸せでした。こんなにも私たちを受け入れてくれたのは、前キャンパー、前々回のキャンパーの方々が関係を築いてくれたからだと感じました。今回もしっかり関係を築くことができたとと思います。GAM (村の人たちとのミーティング) が行われた日はたくさんの村の方々が集まってくれました。そこで一人一人の思いを聞くと、村の人たちにとってグンバは大切なもので、作り始めたからには何年かけても作っていきたくて考えていた。それを聞いて、この村のため、村人たちだけではできないことを手助けしたいと強く思うようになりました。この時に、探していた答えを自分の中で見つけられたような気がしました。村の人たちはなんとかしようとして努力していて、私たちはそこに不足しているもの補い、そして一緒に作り上げて行くこの過程がとても重要だと思いました。多くの方が GAM やイベントに参加してくれたことでこのむらにとってグンバはなくてはならないものだと再確認できました。春のワークの際には若い人から大人の人までみんなで作っていったらなと思いました。逆にこの村に来て、多くのことを学び、多くの人に助けられました。各家庭を周り、プロジェクト班の質問で家族構成、経済状況を聞く際にネパール語で書かれた質問用紙をお母さんたちに見せながらしました。けれどネパール語を読めないお母さんたちが多く、どう伝えればいいのか困ったときに、その家族の子どもたちや、ついてきてくれた高校生が英語で通訳をしてくれました。困っていると助けを頼む前に手伝ってくれた村人の支えがとても大きかったです。JICA でお話を伺って、プロジェクトを進めていくにあたって、自分が知らないこと、もっと詳しく調べないといけないと新たな視点からたくさん気づかされました。グンバが完成して自分たちが村を出て行った後も村の人たちが引き継いでやってくれる、そしてプロジェクトを通して村が循環していけるように基盤を作っていきたいと思いました。

違う文化、初めて出会う人、物が多い中で1か月過ごしたことはとても貴重で様々なことを経験することができました。パネちゃん、キャンパー、先輩方、同期、行かせてくれた親に感謝です。ありがとうございました！

最初に私がキャンプに参加したいと思ったきっかけは一年生の時から FIWC の先輩方から沢山のキャンプの良さや経験談を聞いたことである。一年生の時は親の許可が下りずにいくことはできなかったが、同学年の人達が行っているのをみてさらに行きたいという気持ちが強まった。そして、二年生になり、やっと許可が下りたのだが、いざ行くことが決まると心から打ち解けられるのか分からない人達と想像もイマイチつかない国で共同生活を一か月もできるのか、自分は熱い情熱を持ってこのキャンプに向き合えるのかという気持ちが一気に押し寄せて、その不安を抱えたまま私はネパールへと飛び立った。

砥綿佳澄（西南学院大学外国語学部2年）

事前mtgの話し合いで、地震災害で壊れてしまった冠婚葬祭で使うグンバという建物を立て直すということは決まっていたため、どの部分を建てるのか、修繕をするのかを具体的に決めるのが今回の下見キャンプの主な目的であった。今まで前回のキャンパーから聞いた話を元にぼんやりとしていたイメージが、実際に自分の目で作りかけてあるグンバをみることで、春のワークのイメージを掴むことができた。また、ギャムという現地の村人の人達と話し合いをする場が設けられた時に、震災でグンバが崩れてしまったこと、自分達で建てようとしたが資金が足りなくなってしまうこと、グンバが村人にとってどんな場所であったか、私たちが来たことがどんなに嬉しいかなど一人ずつ熱く語って下さり、グンバを本当に必要としていることや私たちが来たことを喜んでくれることが伝わってきた。来る前の話し合いで、あまり村人が協力的ではなかった話などを聞いていて、本当に村人はグンバを必要としているのか疑問に思っていたが、春のワークのモチベーションに繋がった。そして、私たちの春のワークキャンプの目標である、村人の人達と共に作業をするということに繋げるために今回、村人達と沢山交流し、仲を深めることに重点を置いた。朝と夕方にビジットに行くことを通して今までで日本人キャンパーと関わったことがない村人と交流できたし、毎日二回時間たっぷりあったので一人一人と深く交流することができたので村人を私たちのワークに巻き込んで一緒に作業をするということに繋げることができたかなと思う。どこに行っても快く私達を家にあげて、チャイや食べ物を振る舞ってくれる村人達の優しさにとっても感動した。反省点としては、私はイベント係を務めたのだが、女性や子供達が楽しめるようなイベントになったためワークで1番即戦力となる青年達がせっかくきてくれたのにただ横にたってみているような状況をつくってしまったので、青年達も楽しめるようなイベントの開催をするべきだったという点である。

出発前に抱いていた、キャンパーと打ち解けられるか、キャンプに対して情熱をもつことができるにかという不安はどちらも杞憂に終わった。キャンパーと一緒に過ごしていく中で皆の意外な面を知ったり、皆が徐々に自分に素をみせてくれるようになったりするの嬉しかったし、この過酷な環境の中一か月楽しく生活できたのも間違いなくキャンパーのおかげである。そして、異国からきた私達を快く受け入れて、とても良くして下さいる村人達の力になりたいという気持ちを心から持つことができた。春キャンプを成功させるために頑張るぞ!!!

岡部真輝（西南学院大学外国語学部2年）

このネパールワークキャンプは私にとって、FIWCとして初めてのワークキャンプでした。過去に学校のプログラムとして別のワークキャンプに行ったことはありました。そこに参加してもっと何か活動がしたい、ただ日本で同じような毎日を送るのは嫌だ、もっと違う世界を見たいなど様々な感情を持ちこのキャンプに参加しました。実は、このキャンプに行

ってみるまで私の中には不安がたくさんありました。前回行ったそのキャンプは引率者として先生が何人もついてきてくれていたし日数も 2 週間ほどと半分くらいの滞在で、初めてのワークキャンプではないものの初めてのような感覚でした。ネパールについて全然知らなかったしうまくやっていけるのだろうかとはばかり考えていました。いざ、ネパールに行ってみて私の心境はがらりと変わりました。村の人はとても暖かく私たちを迎え入れてくれ、ネパール語のわからない私にもどうにかして気持ちを伝えようとしてくれ毎日笑顔で挨拶をしてくれました。その村の人たちのやさしさが私の不安をどこかへやってしまいました。村の人と交流する機会が多くあり、一緒に遊んだり話をしたり家庭にお邪魔したり夜ご飯の準備を手伝ってみたりしてたくさんの時間を村の人たちと共有できてすごく楽しく充実した時間を過ごすことができました。日本で過ごす 1 か月よりずっと密度の濃い 1 か月だったと思います。今回、春に向けての下見ということで春につながられるような活動ということをお頭において活動したのですが、私がそれを一番身近に感じたのはイベントの時でした。もちろん春のワークに向けての事後アセスメントやプロジェクト内の家庭状況調査が春キャンプにつながる大きな活動であったと思うのですが、私はイベント係についていたこともありとても印象に残っています。イベントは、春のワークと一緒に活動してもらえよう村の人との交流をすること、日本のことを知ってもらうことなどを目的として行うよう日本でも準備をしてネパールへ行きました。いざネパールについて生活をしていくうえでこのイベントで今年から始まったプロジェクトの何か参考になるようなことはできないか、プロジェクトの対象となる大人の女性をターゲットとした催し物はなにかないかといろいろなイベントに関する改善点が上がってきました。そこで当初予定していた日本食パーティーに加えミサンガのワークショップを開催することに決めました。イベントを経てミサンガのワークショップは行って本当によかったと思いました。村の人とキャンパーと一緒にミサンガを作って出来上がったものを交換したり誰かにプレゼントしたりする姿を見てとても素敵な光景だなと思い心が温まりました。ミサンガのワークショップはプロジェクトにおいて小さいけれど一歩進めたチャンスになったのではないかと思います。日本で計画していたものだけでは出来得なかったことだと思うのでやはり現地に行ってみないとわからないことってたくさんあるなと改めて感じました。今日本の元の生活に慣れてネパールが恋しくなっているこのワクワクを胸に春のキャンプに向けてまたしっかり計画や準備を重ねながらよりよいワークキャンプを春に行えるようメンバーみんな頑張っていきたいです。

大津恵理子（西南学院大学人間科学部 1 年）

小学生のとき、授業で国旗を調べる時間があつた。そのときに調べたのがネパールだった。唯一、国旗が三角の形で変だなあ、どこか遠い国なんだろうなあなんて思っていた。まさか自分が将来行くことになるとは思わなかった。ネパールに行きたいと思ったのは FI の新歓

の時だった。先輩方から話を聞いて、あ、あの三角の国旗の国がある！と思った。ネパールがインドと中国の間にあって日本と同じアジアにあることをここではじめて知った。そんな遠い国じゃないやん！行ってみたい！興味本位のまま私のネパール行きが決まった。でも浮かれ気分なのはその時までだった。ミーティングの回を重ねるごとに自分の知識の少なさ、そのせいで薄っぺらい考えしか出てこないこと、また積極性がなくいつもみんなの考えを頷いて聞くことしかできないことが浮き彫りになっていった。高校まで目の前の決まったことをただただこなしてきただけの私には、自分から考えて動かなければ始まらないこのワークキャンプがとても責任のあるものだと痛感した。出国が近づくにつれて不安が増していった。村人のために何ができるのか、自分が手助けできることはあるのか、モヤモヤしながら出国した。ネパールに到着し、長らくお世話になるグマンに着いた。車から降りた。ここで一か月か...。正直泣きそうになった。歩いてすぐ第一村人発見。「ナマステ〜」「...な、なますて〜」第二村人発見。「ナマステ〜」「...ナマステ〜(照)」そして、ママとパパにご挨拶。「メロナーム、エリコ(照)」「エリコ、エリコ...」ニコニコしながらママが名前を呼ぶ...。そして愛情たっぷりママのご飯盛り盛りダルバートタルカリ、気遣いからどうしても出てしまうパパの「ラッソー、ラッソー」の嵐.....とてつもなくほっとした。村にみんなの一つ一つの言葉が温かく感じた。グマンでの毎日はたくさんの発見があった。一番驚いたのは、村人たちは今の生活に不満を持っていないことだ。vsitに行ったとき何か困ったことはないか、と質問したところ「特にない」と言っていた。地震で崩れてトタンでできた今にも崩れそうな家もあった。お風呂だってないし、毎日停電はするし、移動するのも一苦勞で私からみると、不便さであふれていた。でも、村人からするとそれは当たり前のものでそれ以上のものを求めることはせず、今あるものを使えるだけで十分足りているようだった。これが発展途上国と先進国の差か、と身をもって体感した出来事だった。そして、こうやって少しずつ現地のことを知っていき知識や経験を増やすことが今の自分には必要だと思った。今まで村人のために尽くさなければ、と思っていたが、それに加えて自分の経験値を上げてこのワークキャンプが自分の身になるものにしようと思った。また、反省しなければならないこともある。一つは、ママパパなど身近な人や大人と交流すべきだったと思う。家に来た子供たちや学校であった子供たちとは言葉は伝わらなくても道具を使って遊んだりすれば仲良くなれた。でも大人に対してだと子供たちよりどうしても言葉のコミュニケーションがなければなかなか仲良くなれなかった。Visitに行ったとき大人と話していても会話がすぐに終わったりあいさつ程度になってしまったりして伝えたいことはほとんどパネちゃんに通訳してもらっていた。きっと言葉は通じなくとも伝わることはあったと思う。でももっと密に関わっていくには言葉は大事だと思う。春キャンまでにネパール語を上達させることにしよう。そして次のキャンプでは自分が村人に自信をもって何かを与えられるようになりたい。

最後にこのキャンプに参加するにあたって反対しつつも背中を押してくれた両親、全力でサポートしてくれたパネちゃん、いつも笑顔で優しいパパとママ、そして村人の皆さん、い

つも心配してくださった国内系のゆうさん、ろっきーさん、それから毎日笑顔でいれたのも、こんなに自分を解放できたのも、ネパキャンメンバーの皆さんのおかげです。心から感謝です。ラッソー！

古賀優大（西南学院大学国際文化学部1年）

はじめに、今回キャンプを行うことができたのは滞在した村の人々やコーディネーターのパネちゃん、FIWCの先輩方、そしてキャンプメンバーのおかげです。とても感謝しています。ありがとうございました。

今回の下見キャンプでは、とても有意義な時間を過ごすことができた。約1ヶ月間の現地での生活や村人との交流を通じてたくさんのことを考え、学んだ。ネパールで過ごした1か月間は自分自身の人生の中で最も充実していて、日本で生活する1日とは比べ物にならないくらいネパールでの時間はとても価値のあるもので、キャンプの後半になると日本に帰りたくなかった。何もかもが自分にとって新鮮で、どれも心に残っている。大学1年という時期にネパールに行ってキャンプをするという貴重な経験ができて本当に良かった。

もちろん、ネパールに行くにあたって不安なことはたくさんあった。言葉が通じない中でどうやって滞在する村の人々と良い関係を築くのか、全く慣れていない環境での生活は大丈夫なのかといった不安が常にあったし、ネパールキャンプを経験した先輩方の話を聞く限りではネパールはとても過酷だと言われていたから余計に不安だった。案の定、予想していたより過酷で心が折れそうになることがたくさんあった。夏の時期のネパールは雨期ということで道路は無くなるし、洗濯物は乾かない、行動が制限されることだってあった。今となってはいい思い出だが、相当しんどかったのは鮮明に覚えている。

しかし、そんな過酷な状況ではあったのだがネパールに行く前に感じていた不安のほとんどは村に着いた途端になくなった。それは、村の人々がとても優しいからだ。挨拶をすれば笑顔で返してくれるし、家を訪問した時にはお茶やお菓子などをたくさん出して歓迎してくれる。ネパールに行く前に感じていた不安はなくなった。そして、子どもたちがとてもかわいい。初めて会った時はみんな人見知りで挨拶すらできないような状況だったのに、次の日には仲良くなれた。すぐに名前を覚えてくれるし、毎日遊びに来てくれる子もいる。それがとてもうれしかった。言葉は通じなくてもコミュニケーションをとることが出来ると実感したし、なにより笑顔が一番大切である。とはいうものの、言葉はやはり重要だとも感じた。一番伝えたいことを伝えられないときのもどかしさはなんともいえないものだ。

村に滞在して覚えた言葉の中でとても好きな言葉がある。それは「ラッソー」だ。この言葉は魔法みたいな言葉で村に滞在している時はどんな時でも使える。ごはんを食べる時のいただきますやごちそうさま、通路をあけてほしい時、すれ違った時にも「ラッソー」

を使う。どのような意味があるのかは詳しく知らないが、「ラッソー」という言葉だけで村人と会話ができるような気がしていつも使っていた。それにこの言葉を使うとみんなが笑顔で応えてくれる。日本にもこんな言葉があればいいのにと常に感じていた。

村人と深く交流するようになって感じたことがある。それは自分たちが村人に良い影響を与えることができるようになりたいということだ。自分自身、村人からたくさん良い影響を受けた。その影響というものはとても貴重で簡単に得られるようなものではない。だから、恩返しとして村人のためになるようなことをしたいと感じた。ありがたいことに春にまたネパールに行くことができる。学生だからできることが少ないと考えるのではなく、学生にしかできないことが必ずあるはずだ。春までにもう一度考え直し、より良いワークキャンプにしたい。そして、村人に何かしらの良い影響を与えることができるようになりたい。

今回の下見キャンプではたくさんのご縁を得ることができ、事前ミーティングでは想像もできなかったネパールの現状がよく分かった。だから、今度はネパールキャンプを経験した者としてネパールの状況をたくさんの人に伝えて知ってもらい、そして新しく来る新キャンパーを引っ張っていけるようになる！！

田原優佳（西南学院大学外国語学部1年）

“学生だけで行く、学生だからこそ出来ることがあるワークキャンプ”に魅せられ、このFIWCのキャンプに飛び込みました。春キャンプから参加という選択肢はありましたが、夏キャンプから参加したキャンパーにしか味わえない村人との関わりや達成感がきっとあるよというある先輩からの言葉が、私が夏キャンプから参加した大きな理由です。また、ネパキャンは過酷だよって先輩方からよく聞いていましたが、それでももう一回ネパールに行きたいとおっしゃっているのを聞いてそんな魅力のある国なんだと思ったのがネパールキャンプを選んだ理由です。

1カ月村で過ごして一番感じたことは、ネパールはアジア最貧国といわれていますがそんなイメージとは全く違って笑顔あふれた、みんな生き生きと生活している、そんな場所でした。地震や土砂崩れといった自然災害と隣り合わせの生活ですが、みんな力強く生きていました。逆に私が元気もらったくらいです。見知らぬ日本人の学生が彼らの村の生活に入り込んできて迷惑なんじゃないか、と考えたこともあります。しかし、見知らぬ学生が村にやって来ることにこんなにも歓迎してくれて、visitではもてなしてくれて、本当に感激でした。これは前キャンパーのみなさんが築いてくださった信頼関係でもあるし、ネパールの人の優しさなんだなと実感しました。他に、事前ミーティングで未知のネパールについて精一杯想像して考えていたことも人から聞いてイメージしていたネパールも、私にとって良い部分も悪い部分も大きく違ったこともあって、この村で学生である私たちが

出来ることは何か。ワーク以外でも村人のためにできることはあるのか。村に滞在し始めて何度も考えさせられました。どんな思いで村人と関わっていけばいいのか、自分は何をすべきか、正直色々と分からなくなりました。だからまずはこの村での生活を思いっきり楽しんで、この村とネパールという国を知ろうと思いました。1カ月村人と共に過ごして、この村の人たちの温かさや優しさを感じ、ギャムという話し合いの中で、村人がどれだけグンバの完成を望んでいるのか、前回の屋根の完成にどれだけ感謝しているか、パネちゃんの通訳を通してですがすごく伝わってきました。1カ月の滞在と、UN Habitat、JICAさん訪問を通して、自分なりにたどり着いた考えは資金や期間が限られている私たち学生ができることは、村人自身が主体的に村のためになることをする後押しのようなものだと思います。ボランティア団体が村にやって来たことに対して、彼らが何かをしてくれるのか、今回はどんな良いことをしてくれるのか、と村人が受け身に考えるのではなく、自分たちにも何ができるかなと積極的に考えてくれるようなきっかけづくり、または組織づくりの手助けのようなものだと分かりました。もちろん、学生に似合った規模や、方法で。これも含めて、ボランティア活動することについてたくさん考えさせられたし、考え直さなければいけないことも見つけました。それらを踏まえて、春のワークの組織づくりが進められることは村人にとっても、私たちにとっても良い方向に繋がるんじゃないかと思います。

キャンプを終えた今一番に感じるのは、過酷なこともあったけど最高に充実した日々だったということです。充実というのは、普段の生活では決して体験することが出来ない異国の山奥での農村の生活を体験できたこと、パネちゃんというコーディネーターのもと、下見キャンパー10人で1カ月という期間を一緒に過ごせたことも。そして何より、グマンという村でたくさんの村人と出会えて、また帰りたと思える場所、また会いたい人ができたということが何より、思い返したときに充実した日々だったなと思えます。完璧には言語が通じない村人との関わり方を考えたことも、整備されていないガタガタ道も、見渡す限り山ばかりの自然溢れた土地で過ごせたことも私にとってとても刺激的な毎日でした。

そして、今年のネパールキャンプはまだこれからですが、新キャンパーが7人もいる中で無事に夏キャンプを終えることができたのは、ミーティングに何度も来て下さった国内係のろっきーさん、ゆうさん、3人のネパキャン経験者のリーダー大川さん、ワークリーダーゆうやさん、プロジェクトリーダーあいりさんの存在が大きかったと思います。新キャンパーにとってとても頼れる存在でした。ありがとうございます！春キャンプでは経験キャンパーという立場になるので、もっとキャンプに貢献できるような、頼られるような、キャンパーになりたいです。一回のキャンプでネパールのこと、村のことを全て知った気にはなれないし、経験値はまだただけ、今回夏に見たネパールに加えて次の春キ

キャンプで違う視点から見えるネパールもまた楽しみです。そして春も今回のキャンパーのみんなとネパールに行けることがほんとに楽しみで嬉しいんです。

北川真衣（九州大学経済学部1年）

『ネパールに行って村に一か月間滞在してボランティア活動を行う』と聞くと、期間も長いし、遠い国だし、何よりそこは発展途上国であるし、なかなか大変なことにおもえませんが、私はあまり思慮深い人間ではないので「ネパール!?行ったことない!行ってみたい!」という自分の好奇心の赴くままにキャンパー募集に応募しました。そして無事一か月間のネパール生活を終え、今振り返りの感想を書いているわけですが、まず言いたいのは「好奇心の赴くままにネパールキャンプに応募した自分ありがとう!!」です。ボランティアをしに行くという立場ではありましたが、ネパールで多くのことを学び、今思い返しても心があったかくなるような素敵な経験をたくさんさせてもらって、逆に私が満たされて日本に帰ってきました。このわずかな量の文章ではそれらの学びや経験を語りつくすことは到底できないので、私が学んだことを一つだけ紹介します。

それは「言葉以外のコミュニケーションツール」です。私は何度か海外に行ったことがありますが、英語がほとんど通じない国に行ったのは今回が初めてで、現地に行く前は「日本語も英語も通じないのにどうやって村の人々とコミュニケーションをとればいいのか」と考えていました。しかし、いざ村につくと、村の人々の笑顔や、「ジャパニー!!」と大きな声で駆け寄ってきて私の手を握ってくる子供たちの姿に、私の不安は一瞬で消えていきました。確かに、お茶を飲みながらお話ししたりするときには相手が何を言ってるのか全くと言っていいほど理解できないこともたくさんありました。しかし、目尻にかわいいしわを浮かべてにこにこしながらなにかを話している村人を見ると、村人が空を指さしながら嬉しそうに話していたら、「天気が良くてうれしい!」って言ってるのかなとか、手を大きく左右に振りながら険しい表情をしていたら「川が氾濫して道が流されたことを言ってるのかな」とか、なにを話しているのか何となくわかる気がして（私の予想は完ぺきに外れていたのかもしれないけれど）自然とうんうんとうなずいている自分がいました。それは本当に心地いい時間でした。はじめて訪れた村のはずなのに、里帰りしておばあちゃんと話してるような気持ちになります。今思い返しても、「はやくまた会いたいな!」と思うような人々ばかりです。

ネパールで生活して、村の人の温かさに触れて、自分の故郷のような、思いだすと「帰りたい」と思える場所ができました。電気もほとんどないし、ご飯は毎日一緒だし、お風呂は冷たいような場所ですが、現地に行ったらそんなの不便と感ずる暇もないほどわくわくと驚きと楽しさにあふれたキャンプです。春はいよいよワークが始まるので、そんな村人たちとまた一緒に生活して一緒にワークができることが今からとても楽しみです!

NEPAL CAMP

2018 SUMMER



- 大川峻右 西南学院大学経済学部 2年
寺田愛理 九州大学農学部 2年
洲崎祐也 西南学院大学人間科学部 2年
砥綿佳澄 西南学院大学外国語学部 2年
岡部真輝 西南学院大学外国語学部 2年
友松陽向 西南学院大学人間科学部 2年
大津恵理子 西南学院大学人間科学部 1年
田原優佳 西南学院大学外国語学部 1年
古賀優大 西南学院大学国際文化学部 1年
北川真衣 九州大学経済学部 1年

FIWC 九州(代表:田中ゆう)

Mail: fiwcq@hotmail.com

Web: <http://fiwckyushu.jimdo.com>

(FIWC 九州公式ホームページ)

Twitter: @fiwckyushu

Instagram: @fiwckyushu

